

【論 文】

## 限界集落に生きる人々の「語り」の共有化の試み

—島根県雲南市掛合町の一集落を事例として—

江口貴康・片岡佳美・吹野 卓

（島根大学法文学部）

キーワード：限界集落，語り，思い，文集，生き甲斐

### 摘 要

人口が流出し過疎化し続ける農山漁村の集落では、その集落を存続させ続ける担い手が減少の一途をたどっている。担い手が減少し続ける集落は、その維持に限界が来る状況になっている。近年限界集落に対する研究が行われているが、その中に、限界集落対策は、限界化初期において対応すべきであり、その場合重要になるのは、限界化が進行する時期に生じる住民の「あきらめの意識」の拡がりを阻止し、除去するための対応であるという研究がある。島根大学法文学部社会学研究室では、限界集落への支援の試みとして、島根県内の中山間地域の一集落を対象とし、2007年度に「聞き書き文集プロジェクト」を企画・実施した。本プロジェクトの目的は以下の2点、すなわち、(1) 過疎化・高齢化が進む集落の住民による語りを通して、生き甲斐や地域への思い等を調査すること、(2) 外部（研究者等）から新たなコミュニケーション通路を提供することが地域住民間に思いの共有化などの効果をもたらすのかについて測定すること、である。これらの目的を実施するために集落住民の語りを「文集」化し、集落住民への文集作成効果を測定した。

文集に見られる住民の「語り」から以下のこと、すなわち、(1) 中山間地域に住む人々の生き甲斐は、個人的志向のものよりも、むしろ他者との関係性を志向するものが多い、(2) 集落住民の地域への思いは強く、地域的愛着も強い。また貢献意欲も強い、(3) 地域における高齢化の進行に伴い地域が抱える諸問題が増加している、ことなどがわかった。

また、文集作成による住民への効果は以下の3点に整理できる。すなわち、(1) 文集作成の過程における「語り」によって、「自己確認」の効果、(2) 「家族」においては、夫婦間で地域の人々の思いを共有する効果、(3) 「地域社会」における「文集」作成は、日常生活では可視化しにくい地域住民一人一人の「思い」を表面化させ、それを地域の他の人々と「共有化」する可能性をもたらす効果、である。

以上のように、外部から介入して作成する「文集」は、自分を振り返る自己確認や家族・地域における思いの共有化などの効果がある程度期待できることがわかったが、文集作成は地域社会において、次の実践的意味を持つと考えられる。(1) 「文集」作成は、集落住民の「思い」の共有化をもたらし、集落住民間の連帯を強め、「互助」を活性化させるという形で機能する。(2) 自治体等が、量的に制約のある公的援助を有効に活用するためには、「住民が生活する上で本当に何を求めているのか」について知り、最も求められているものに優先順位をつけて対応してい

かざるを得ないが、住民の生の声を聞くために「文集」作成を推進し、記述された「語り」の内容を支援策の策定に役立てることができる。

## 1. はじめに

高度経済成長期に、過密化・過疎化が問題化されて以降、大都市圏における人口集中化および農山漁村を中心とした地方の人口減少とそれに付随する諸問題については常に指摘され続けている。

人口が流出し過疎化し続ける農山漁村の集落では、その集落を存続させ続ける担い手が減少の一途をたどっている。担い手が減少し続ける集落は、その維持に限界が来る状況になっている。

大野は、山村集落分析を行う際に、生産と生活の面でその維持に限界が来ている集落を「限界集落」と呼んでいる（大野 2005）。大野は、集落内の世帯類型に焦点を当て、集落の状態を「存続集落」「準限界集落」「限界集落」「消滅集落」に区分しているが、「限界集落」とは、「65歳以上の高齢者が集落人口の50%を超え、独居老人世帯が増加し、このため集落の共同活動の機能が低下し、社会的共同生活の維持が困難な状態にある集落」である（大野 2005：22-3）。

集落を構成するそれぞれの世帯が次の世代を再生産できれば、世帯の集合体である集落は維持できる。しかし高齢者世帯が集落の半数を占めるようになると、集落の維持は困難になり、結果として集落が消滅してしまう。作野は、中山間地域における地域問題に対する集落への対応について詳細に分析しているが、残念ながら集落が消滅に移行する場合には、「むらおさめ」という形で、集落住民の「尊厳ある暮らし」を保障するとともに、集落住民が有する知識・技能、暮らしや生産の様子などの情報を記録として保存し、その知恵を次世代につなげるべきだと提案している（作野 2006）。

最近では、限界集落が消滅化する過程の詳細な分析が行われている（例えば、笠松 2005、作野 2006、小田切 2008）。小田切は、笠松（笠松 2005）の分析図式を踏襲し、集落が限界化するプロセスを3ステージに区分した（小田切 2008）。すなわち、①人口・世帯数がともに急減するが、集落機能の停滞はさほど目立たない「限界化初期」、②地域に残る高齢者の死亡や他出により人口・世帯の減少が進み、集落機能の急激かつ全面的な脆弱化が発生する「限界化中期」、③高齢者ばかりが数名程度となる「限界化末期」である。小田切は、限界化初期から中期に移行する点を「臨界点」と呼んでいるが、これは集落機能の低下が急速に進行する境界線であり、限界集落対策はこの「臨界点」を超える前、すなわち限界化初期において対応すべきだと指摘する。その場合重要になるのは、「臨界点」の前後に生ずる住民の「あきらめの意識」の拡がりを阻止し、除去するための対応であることを強調する。「あきらめの意識」は集落の共同する力を削ぎ、集落機能の急速な低下をもたらすからである<sup>1)</sup>。

このように、集落住民の多くに「あきらめの意識」が蔓延すると結果的に集落機能の低下をもたらすが、「あきらめの意識」が強くなるということは、同時に「生き甲斐」などの生きている喜びが減退していることを意味しよう。

吹野・片岡は、島根県の中山間地域で質問紙調査を行い、質問紙に含まれた「生き甲斐」に関する質問の自由回答欄に書かれた自由記述について数量的分析を行ったが、その結果、精神的な

安定感に関する「安定因子」、自己の活動や自己実現に関する「自己因子」、他者との関係に関する「社会因子」という3因子が抽出された(吹野・片岡 2006)。生き甲斐に関する自由回答でもっとも頻度の高い言及事項の一つは「家族」に関するものであったが、これらの事項は自己因子得点が低い。このことは次のことを意味する。すなわち中山間地域に住む人々(主に高齢者だと推測される)の「生き甲斐」の多くは、自分が楽しむためのものというよりも、家族を含んだ他者との共生を求めることなのである(吹野・片岡 2006: 24)。

吹野・片岡の分析から、中山間地域では、自分という存在が周りの人びとに受け入れられ、生きている実感が得られるような状態が特に求められていることがわかった。そこで島根大学法文学部社会学研究室では、島根県内の中山間地域における限界集落に焦点を当て、集落への社会的支援方法を検討し、その実践を試みた。

## 2. 「聞き書き文集プロジェクト」の目的、分析枠組、調査企画

### 2.1. 「プロジェクト」の目的

限界集落への支援の試みとして、社会学研究室では、2007年度に「聞き書き文集プロジェクト」を企画・実施した。本プロジェクトの目的は、以下の2点である。

(1) 過疎化・高齢化が進む集落の住民による生き甲斐などについての語りを通して、生き甲斐や地域への思い等を調査すること。

過疎化が進む限界集落において、在住する住民は高齢化し、生き甲斐や将来に対する不安などいろいろな思いを持っている。第1の目的は、過疎化が進行した集落の住民に生き甲斐などについて聞くことによって、その思いを知ることにある。聞き取り調査の結果は、生き甲斐があるかどうか、あるとすればどのようなものか、ない場合には、どのような対策をとるべきなのか、など検討する基礎資料となる。また、地域への思いを聞くことで、個人としての生き甲斐が自覚されていない場合でも、集落内で住民間の共通の目標を見出せる可能性がある。

(2) 外部(研究者等)から新たなコミュニケーション通路を提供し、地域への効果を測定すること。

「新たなコミュニケーション通路」とは、集落内の住民に公開を前提とした聞き取り調査に協力してもらい、その「語り」を文集形式でまとめたものを指している。この研究の特徴は、集落外部の研究者が「文集」作成という働きかけを集落に対して能動的に行い、その効果を測定する社会実験型の研究である点である。

以上2つの研究目的を達成するためのアプローチが、地域住民の「語り」による「文集」の作成である。住民による「語り」を文集にすることは、それ自体「生き甲斐」など住民の思いに関する基礎資料になる。さらに、作成された「文集」は「生き甲斐」「地域への思い」などを含んだ住民相互の理解を深めるコミュニケーション通路となる。日常生活のなかで集落内でのコミュニケーションが行われ、相互の理解・共感のための重要な役割を果たしていると考えられるが、「日常生活での会話」という枠から離れた「文集」というコミュニケーション通路の存在は、日常会話とは異なる住民相互の理解・共感のための手段となると推測される。

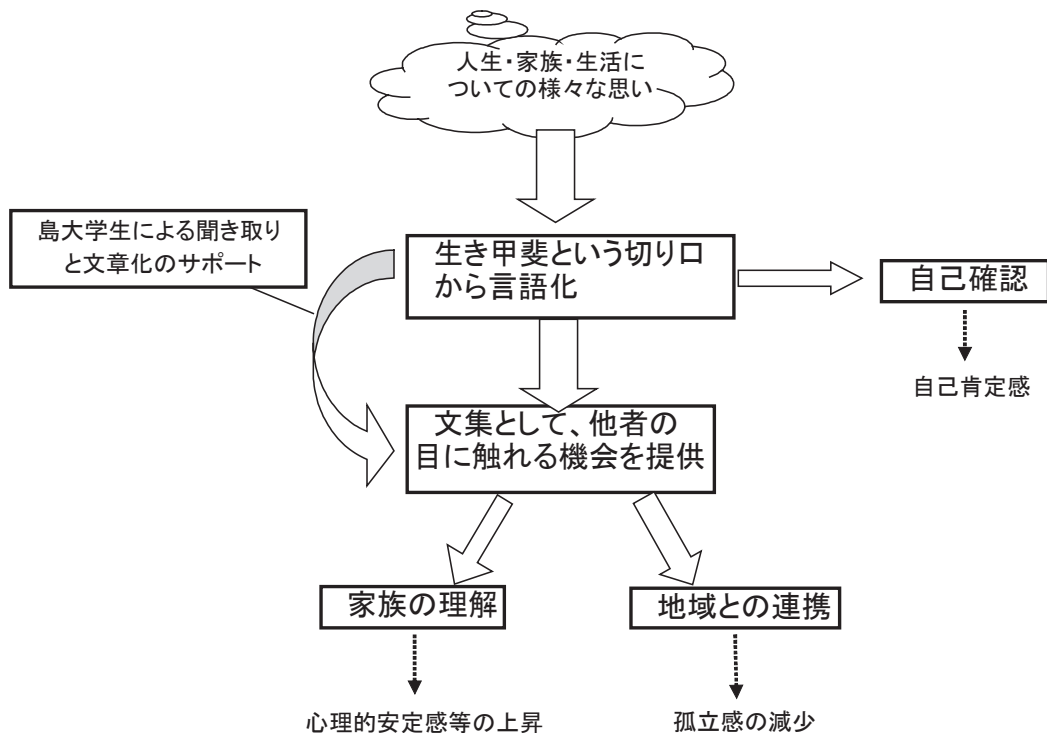
たとえば住民が自主的に行う様々な地域おこしのイベントや郷土誌の編纂などは、地域住民同士の理解・共感に寄与するものである。ただし、これらは限界集落全体の住民が参加するといっ

た性質のものではない。ここに、外部からの働きかけにより「文集」を作成し、それを集落内の全戸に配布するという試みの意義がある。

## 2.2 「プロジェクト」の分析枠組と期待される効果

図1は「聞き書き文集プロジェクト」の分析枠組である。集落到に住む人々は自分の人生、家族、生活について様々な思いを持っている。日常生活では目に見えにくいそれらの思いについて、島根大学の学生が集落住民へ聞き取りを行い、かつ文章化のサポートをすることで可視化する。その一連のプロセスは、集落住民にとって、自分、家族、地域について改めて考える機会になると仮定した。

図1 聞き書き文集プロジェクトの分析枠組



この文集プロジェクトから期待される効果は以下の3つである。

### (1) 文集作成参加者個人への効果

人生・家族・生活についての様々な思いを、生き甲斐という切り口から言語化し、「文集」として可視化する。「文集」は文集作成の参加者自らにとっては自己確認のための道具となり、その人生のプロセスを省みることで自己肯定感の一助となることが期待される。

### (2) 家族への効果

「文集」は家族の目に触れる機会を提供する。そのことにより、家族内では家族間の理解を深め、

各家族成員の心理的安定感等の上昇をもたらすことが期待される。

### (3) 地域社会への効果

「文集」は他の地域住民の目に触れる機会を提供する。それにより、集落内の他の住民の思いを新たに知ること、地域内の連携を強め、その結果個人の孤立感の減少につながる機会になることが期待される。

## 2.3 「プロジェクト」の調査企画

分析枠組から得られる「文集」作成の効果を検証するため、以下2つの調査を企画した。

### (1) 「聞き書き文集」の作成（第1次聞き取り調査）

各戸に調査員（学生）2～3名を派遣し、それぞれの家族成員に、生き甲斐、地域に対する思い、自らの生活について、集落住民の方たちに話を聞く。それらの話をもとに、各調査員が聞き取りした内容を文章化し、それをまとめた「聞き書き文集」を作成し、それを集落の全戸に配布する。

### (2) 「文集」による各家庭（個人）への効果測定（第2次聞き取り調査）

「聞き書き文集」を配布後、各戸に調査員3名程度を派遣し、それぞれの家族成員に、文集が家族内および集落内のコミュニケーションにどのような影響を及ぼしたかについて聞き取り調査を行ない、その結果に基づいて、調査者がその効果について測定を行う。

## 3. 調査対象地の地域特性と調査プロセス

### 3.1 調査対象集落の決定

医療検診などで中山間地域の事情に詳しい島根大学医学部教員や島根県雲南市の市役所職員から調査対象となる候補地について聞き取りを行い、収集した情報をもとに、調査対象となる地域を決定した。その決定要因は以下の4点である。

#### (1) 集落特性の妥当性

調査対象集落が高齢化率50%以上で戸数が20戸未満であり、限界集落とみなすことができること

#### (2) 集落規模の適切さ

道路沿いに集落が比較的密集しており、時間制限がある中での聞き取り調査が実施しやすいこと

#### (3) 住民の協力体制

自治会長が協力が積極的であり、集落内の住民にも協力を得られやすい集落であること

#### (4) 調査地区までの距離

交通手段の都合上、レンタカーで調査員である学生を連れて行くのに支障がない距離であること

### 3.2 調査対象地の地域特性

#### 3.2.1 地域特性と歴史

島根県の日本海側から中国山地に向かって国道54号線を進むと、なだらかな坂や平坦な道の先にやや険しい坂道が続き、その道の先の峠を越え、しばらく進むと広島県に出る。島根県雲南市

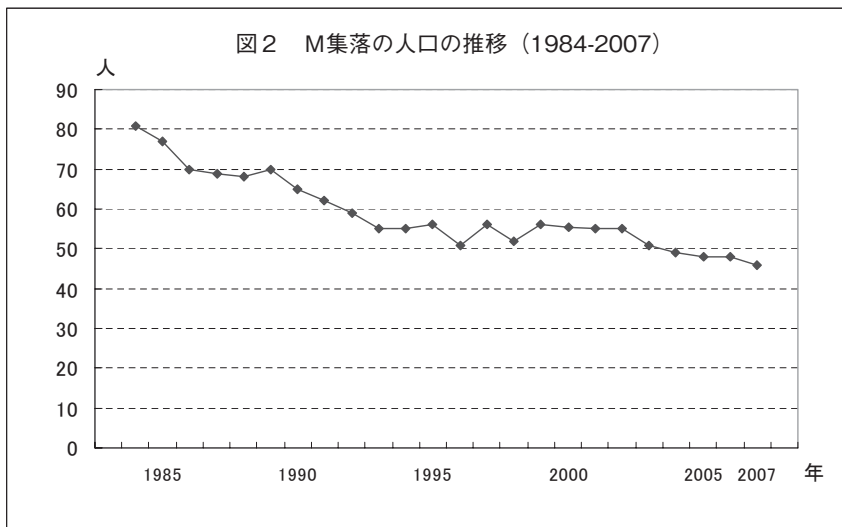
掛合町はその険しい坂道の途中にある。同町 I 地区は同町の中でも山間に位置する。M 集落はその I 地区の中心であり、I 小学校、郵便局、農協、ガソリンスタンド、散髪屋、小商店など日常生活に関連する諸施設が集まり、周辺地域の生活機能を集約している集落である。集落は、国道 54 号線から脇道に入った旧街道沿いにあり、国道に並走して形成されている。周りには標高 600～800メートル程度の山が点在しており、集落内には幅 3～4メートルほどの小川が流れている。集落のある地点の標高は約 360メートルほどであるが、日本海からの湿った空気が周りの山面に当たる地域のため、冬は大雪が降り、積雪量が多いときで 2メートル近くにもなる。

M 集落は、明治 22 年頃に軍事目的のために旧街道ができた後、明治 25 年あたりから街道沿いに集落を形成し、I 地区の中心地域として発展した。明治期には周辺農家の跡取り以外が多く居住し、炭焼き、林業、道路工事作業、たたら関係の仕事に従事することが多かったようであるが、旧街道沿いにあったため宿場町としても発達し、郵便局、旅館、商店などが立ち並ぶようになる<sup>2)</sup>。

同集落にある商店街は、昭和 30 年代頃にもっとも活気があり、複数の旅館や 4～5 軒の商店が連なり、昭和 44 年に国道 54 号線が開通するまでは、集落内にバスが通るなど交通の要所でもあった。町部であった同集落の住民の生業は、農業・林業への従事が比較的少なく、近隣地域への会社勤め、役場勤め、学校関係の仕事、郵便局関係の仕事、商売などの自営業などに携わる人が多かったようである。集落内の商店街のお祭りも盛大に行われており、若い世代や子供も多く居住していた。小学校の児童数は最も多いときで昭和 34 年の 177 人<sup>3)</sup> であり、M 集落だけでも 60 人ほどの児童がいたとのことである。しかし「昭和 38 年 1 月豪雪（いわゆるサンパチ豪雪）」で住民に多くの被害が出たことで、それを一つのきっかけとして M 集落を離れる人や世帯が増え、それ以降集落人口は減少していく。

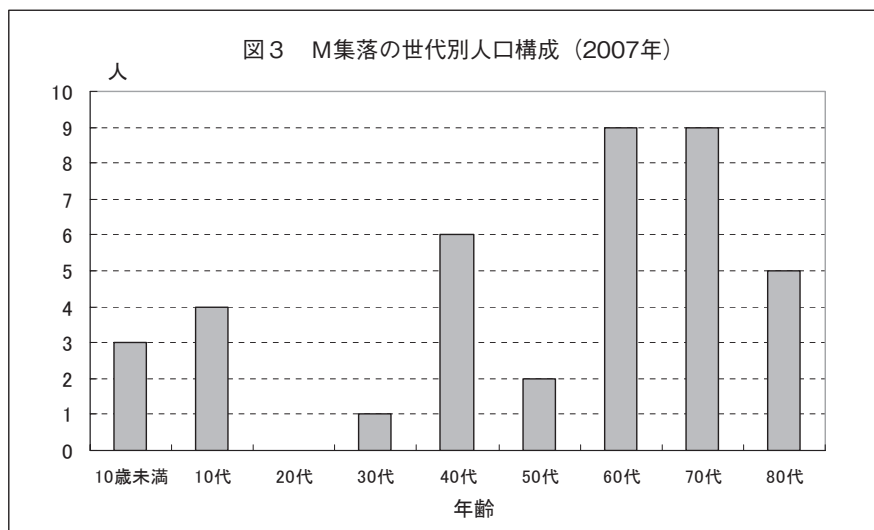
### 3.2.2 集落人口の推移と世代別人口構成

高度経済成長期以降、人口が減少傾向にある M 集落であるが、最近 20 数年間の人口数の推移は以下のとおりである（図 2）<sup>4)</sup>。



1984年には集落人口が81名であったが、その後10年ほどの間に1993年の55名まで急減する。この間は年間の減少幅が大きいことから、世帯での集落外流出が多かったと推測される。1993年から2002年までは人口の増減があったものの55名前後を維持しているが、2003年に51名になって以降減少し、調査時点である2007年には46名まで減少している。2003年以降は、平均して毎年1名程度の人口が減少しているが、その原因は高齢者の転出や死亡などがほとんどである。

次に2007年のM集落における世代別の人口構成を見てみよう（図3）<sup>5)</sup>。



M集落の世代別の人口（2007年）は、10歳未満3人、10代4人、20代0人、30代1人（37歳）、40代6人、50代2人（2人とも55歳以上）、60代9人（内65歳未満は2人）、70代9人（内75歳以上は1人）、80代5人（最高齢は88歳）となっている。集落の戸数は16戸であり、そのうち3戸に小学生の子どもがいる。その親は主に40代である。20～30代の若者世代はほぼ皆無である。高度経済成長期以降、教育機会や就業機会を求めて若年層の人口流出が続くことで集落の次世代を担う層が減少し、同集落に居住し続ける人やUターン者は高齢化しつつあり、現在に至っていることがわかる。65歳以上の高齢者は21名で高齢化率は約54%であり、限界集落の目安とされる50%の境界線を上回っている。

2007年時点でのM集落における最も低い年齢は7歳である。この子どもたちが高校を卒業する時期である10年後は、集落に人口の出入りがなければ、就学期の子供を除いた最も若い年齢層が40代1名および50代6名、65～74歳の前期高齢者が4名、それ以外の21名が75歳以上の後期高齢者となる。ただし現在でも80歳以上の高齢者が5名いることを考えると、Uターン等で年齢層の若い人が集落に移住しない限り、ここ10年の間で集落人口が急減する可能性が高いと予想される。

### 3.3 調査プロセス

#### 3.3.1 第1次聞き取り調査：「文集」作成のための聞き取り調査

第1次聞き取り調査は、以下のようなプロセスで行なった。

(1) 住民への説明会の実施

2007年8月29日、M集落の自治会常会で、調査実施の挨拶およびプロジェクトの説明を行い、調査員である学生が聞き取り調査を行うことに対しての協力を依頼する。その際、自分で文章を書いていただける方のための用紙も配布した。

(2) 第1次聞き取り調査の実施

同年9月17～19日の3日間、M集落において「生き甲斐」や「地域への思い」などについて聞き取り調査を実施した。集落の全16戸中14戸（17名）から、話を聞くことができた。調査対象者の性別の内訳は男性10名、女性7名、年齢別人数は40代1名、50代1名、60代6名、70代7名、80代2名であった。

調査員である参加学生は14名である。参加学生に対しては、事前に聞き取り調査のための説明会を実施した。

(3) 第1次聞き取り調査結果の文章化と「文集」の作成

同年9月末までに、調査員として参加した学生に聞き取り調査の結果を文章化させた。そしてそれをもとに第1次草稿を作成した後、10月26日にその草稿を各戸に配布し、対象者本人から訂正後の文章を郵送していただいた。このような手続きによって対象者の了解を得た上で、訂正済み原稿を「聞き書き文集M」として「文集」にまとめた。「文集」は、効果測定のための「実名入り版」（住民への配布版）と、一般公開できるように個人情報削除した「見本版」の2種類を作成した。

### 3.3.2 第2次聞き取り調査：「文集」による各家庭（個人）への効果測定

第2次聞き取り調査は、以下のようなプロセスで行なわれた。

(1) 「聞き書き文集M」の配布

同年11月23日に、M集落において実施された忘年会において、M集落全戸に「実名入り版」を配布し、それを読んでいただくよう依頼した。

(2) 第2次聞き取り調査の実施

「文集」作成の家庭内・地域内での心理的効果測定のため、同年12月15～16日の2日間、「文集」を読んだ感想などについて、集落内の対象者に聞き取り調査を行った。事前に調査内容の説明と調査期間について連絡しておいたが、留守宅や家庭内の事情などで時間がとれないお宅もあり、結果として9戸10名の対象者から話を聞いた。

(3) 第2次聞き取り調査結果の整理

調査員である調査参加学生が、聞き取り調査の結果を整理し、12月26日を締切として提出した。



## 4. 第1次および第2次聞き取り調査の結果

### 4.1 第1次聞き取り調査の結果

#### 4.1.1 生き甲斐

##### (1) 趣味, 生涯学習

生き甲斐の代表的なものとして、趣味がある。趣味は、自分の楽しみとして行うことである。M集落においては、次のような個人的趣味があげられている。

「趣味は今までやってきたような真空管やスピーカーを駆使して好きな音楽を聴くことです。他にも、プルーン、梅、かぼちゃ、玉ねぎ、里芋などいろんな農作物や果樹の栽培を行なっています。やはり趣味があると、仕事にも張り合いが出て生きる活力が湧いてきますね。」

(Aさん 71歳)

「趣味は、盆栽と生花です。とくに盆栽は五十年来で、癒しの場になっています。ときにはすべての事を忘れて、盆栽に熱中したこともありました。その他に楽しみとしては、旅行です。国内はもとより海外へも随分行きました。特にハワイには五回も行きました。そのうち二回は、二人の子供の結婚式を挙げるためです。」(Mさん 72歳)

音楽、旅行、盆栽と生け花など趣味の代表的とも言えるものがある一方で、農作物や果樹の栽培など趣味と実益を兼ねたものもあげられている。

「趣味で詩吟をやっています。今度昇段試験があって、三曲の中からどの曲が出るか分からないから全部を覚えます。ほかにも絵手紙や折り紙、手元を使うからテレビゲームをしたりもします。また、週一回のゲートボール、プールでの転倒予防運動や老人会のイベントにもよく参加します。友達がたくさんできて楽しいし、自分よりも年上の人も大勢おられていろんな人の話が聞けます。」(Oさん 69歳)

Oさんの場合、個人で趣味を楽しむだけでなく、その活動を通して他者との関係を築き交流することも楽しんでいる。また、自分の好きなものを生かして他者との社会的関係を積極的に構築しようとする人もいる。

「私は花が好きなので、花を見ることも作ることも好きです。花を見ると緊張した気持ちが和らぎ、花があれば、その場も明るくなります。昭和56年に54号線沿いにあじさいを植えたことをきっかけに、今はM地区に数ヶ所ある花壇を作ったりしています。自分が植えた花を他の人に見てもらうことも、見てもらって「綺麗ですね」という言葉をかけてもらうのもうれしいです。」

(Dさん 65歳)

Dさんの活動は、自分が好きな花を人にも見て楽しんでもらおうという働きかけを伴う趣味である。また、その活動のモチベーションは、他者からの肯定的評価によって強められている。

「現在、雲南市からソフト事業に対するお金が出たことにより、郷土誌の作成を行っています。…一日中資料を読んでいることもあります。予定では明治以降の郷土誌を作るつもりでしたが、どんどんと過去へ遡っています。沼にはまったようにどんどんと楽しくなり、最近では妻もだんだんと染まってきています。」(Eさん 66歳)

Eさんの場合は、趣味の一種であるがその学習的側面が強調される生涯学習であると言える。興味深いのは、自分がのめり込むだけでなく、配偶者も巻き込んで楽しむ活動になっている点である。

## (2) 子供の成長と家族の拡大

趣味に比べると、普段の自覚はあまりないが思い返すと生き甲斐として認識されるのが、家族の存在である。

「娘たちは専門学校を卒業し、今は二人とも看護師として働いています。二人とも結婚して家を出て、孫にも恵まれました。孫の顔を見るのはとても幸せです。」(Hさん 67歳)

「生き甲斐といえるほどははっきりしたものではないのですが、今は息子夫婦や孫たちがいるので楽しい生活だと思います。」(Jさん 74歳)

「七十歳を過ぎて、一番の生き甲斐は、やはり子供や孫が元気で成長し、社会のために一役を担ってくれればいいと思います。」(Mさん 72歳)

子供の成長に対するこれらの思いは、人生の中で忙しく働いてきたため趣味と言えるものを持たなかったが、気づいてみると自分が生きてきた証が子供であり、その子供である孫であったということであろう。また、M集落内では若い世代であるQさんは、仕事に忙しく自分の趣味が持てないが、子育てを大きな生き甲斐として生活している。

「私にとっての生き甲斐は、何と言っても「子ども達の成長」です。私には小学校六年生の娘と三年生の息子がいるのですが、クラブ活動を行っており、とても活発な学校生活を送っているようです。

仕事もありますし、子ども中心の生活という事もあり、趣味は持てません。しかし自分自身の趣味よりも、子ども達の成長する姿を見るのが何よりの楽しみです。」(Qさん 42歳)

## (3) 他者との交流

Iさんは小さな商店を営んでいるが、店の営業を通して、地域の人との交流が生き甲斐となっている。そこには、日常生活の中で交わす会話の重要性が見受けられる。さらに、商売を通して得られる地域の人との日常的な信頼関係が生きる糧となっている。

「私にとって生き甲斐とは、ことさら大げさなものではなく、子供やお客さんのために働くこと

であり、またお店でお客さんと交わす会話であったりします。今は息子と二人で経営している店ですが、息子が店に出ているときでもなじみのお客さんが「おばあちゃんは？」と自分を指名してくれるのは嬉しいものです。(中略) それでもやっぱり人と話すのは楽しいし、信頼され必要とされるのが嬉しいことです。そういう気持ちが常に根底にあって、日々の生活の張りになっているような気がします。」(Iさん 74歳)

#### (4) 他者・地域への貢献

Qさんの場合、ボランティア活動を通して地域貢献を行っているが、同時にそのことが自分の存在意義を確認することにもなっており、それが生き甲斐の一つとなっている。

「このM地区には仕事場が近いという理由で住んでいるのですが、きっと縁があったのだと思います。時々ボランティアなどをさせて頂いています。M地区はお年寄りが多いので、若い人がどんどんそういった事をすべきだと思っています。ボランティアをしていると、地域の役に立っているなあ・・・と思えてきます。人のために何かするというのも、私の生き甲斐なのかもしれません。」(Qさん 42歳)

Nさんは、親の代から続けている毎日の新聞配達を通して地域住民に貢献することが生き甲斐の一つとなっている。そのため旅行なども行きづらいが、それを超えたやりがいがあるNさんの日常生活を支えている。また、Nさんは70歳であるにもかかわらず一日の大半を仕事と農作業に費やしているが、毎日の規則正しい生活が1日1日の濃密な日常を生み出すことによって充実感を感じさせ、それが結果的に生き甲斐となっている。

「朝四時からI地区の約九十戸に新聞配達に行きます。昭和十年頃の親の代からやっています。一時間くらいかけて配達をした後、五時半ぐらいに帰ってご飯を食べて勤めに出ます。勤めは掛合で、経理の仕事をパートで午前中やっています。昼ごろに帰って昼寝をしてからは、田んぼや畑の仕事をします。田んぼは最近始めました。畑では季節の野菜を作ったりしています。なるべく農薬も使わないようにしています。一日が濃密で生き甲斐を感じますし、健康にも気を使っています。

趣味は、相撲や野球を観たりするのが好きです。旅行には新聞配達の仕事があるのでなかなか行けませんが、地域のためと思ってやっています。地域のいろいろな機能が無くなってはいけませんと思います。

仕事は家族のためと言う気持ちと、M地区がI地区の中心だから皆さんの役に立てばという気持ちでやっています。」(Nさん 70歳)

### 4.1.2 地域への思い

#### (1) 地域への評価と愛着

M集落を取り巻く自然環境は、そこに住む人の日々の生活に潤いを与えている。

「ここは山もあるし川もあるし本当にいい所だと思います。」(Eさん 66歳)

「M地区は自然がいいです。水道も伏流水を使っているし、新聞配達のときに見る山の雲海もすばらしいときがあります。」(Nさん 70歳)

しかし一方で、豊かな自然環境に恵まれているがゆえに生じる問題、すなわち大雪や大雨などの自然災害や獣害も生じている。

「M地区の自然や静かなところはとても気に入っていますが、雪や大雨などの自然災害にも悩まされることがあります。畑の方では熊が降りてきて、農作物の枝を折る被害などもでています。」(Aさん 71歳)

M集落は古くからの集落であり、長年住んでいる住民間のつながりは強い。そのことに対する肯定的評価もあれば否定的評価もある。肯定的評価をする人は、濃密な人間関係に基づいた地区内での協力関係や相互扶助を重視している。

「M地区は人と人の関わりが強い地域ですが、それが嫌で出て行く人もいます。しかし、心のつながりを濃くし、皆が助け合っていくべきだと私は思います。」(Qさん 42歳)

「このM地区は過疎化、高齢化が進み、若い人も少なくなっています。しかし誰かが「やろうよ」と声をかけると、草刈りや夏祭りの飾りつけなどもみんなで協力してできたりと、団結力のあるまとまりのよい地区です。また、困ったときには助け合えるところがいいです。」(Dさん 65歳)

M集落は周辺地域のなかで中心的な地区であるが、そのような地域が過疎化する過程で寂れていく状況に対し寂寞の思いを感じている人も多い。特にこの地区で生まれ育った人はここに愛着を持っており、なおさらさびしい思いを強く感じている。

「かつてはM地区がI地区の中心でお店もたくさんあって栄えていましたが、人が少なくなり、行事なども年々寂しくなっています。」(Cさん 77歳)

「M地区は、自分の生まれ育ったところなので愛着はありますね。最近は昔のような活気も無くなってきていて寂しい思いもしています。」(Gさん 59歳)

## (2) 地域への貢献意欲

この地区に愛着を感じている人は、地域住民と協力したり、貢献したりして、地域を良くしたいという意識を持っている。また、諸事情があってこれまであまり貢献できなかった人も、あるきっかけがあれば貢献したいという意識がうかがえる。

「私はここM地区にとっても愛着を感じているので、そこに住む近所の皆さんと協力してよりよい「M地区」を作っていきたいという思いがあります。」(Aさん 71歳)

「私は親の介護が忙しくて、地区の委員の仕事が十分にはできませんが、これからは地域のために少しでも貢献していきたいと思っています。頓原あたりまでなら、私が車で送ってさしあげてもよろしいですよ。」(Hさん 67歳)

### (3) 地域での人間関係と相互理解

集落内の人間関係が強く、相互扶助の意識が高い一方で、その状況に居心地の悪さを感じている人もいます。例えば身体に障害があるGさんは、その障害に対し気を遣ってもらっていることに感謝しつつ、地域の中に溶け込めないことに居心地の悪さを感じている。「気を遣ってもらっている」ことがGさんと地域の人々との間に「距離」を作り、その結果対等な関係を形成しづらくしている。Gさんが望んでいるのは、自分のあるがままの状況を理解してもらい、お互いが理解できる状況である。外部からは見えない一部住民の心理的葛藤が、文集を通して見えてくる。

「私の障害のことは地区の皆さんもご存知なので、皆さんには気を使っただいて感謝しています。ただ、すこし距離を感じたりもします。わたしは、人に迷惑をかけたくないという気持ちが強いのか積極的に自分のことを話したりできません。ですからもっと皆さんに私のことを知ってもらいたいという気持ちがあります。

私は足が悪いので、家のチャイムを鳴らされてもすぐには玄関に出ることが出来ません。ようやく出た時にはすでに帰ってしまわれた後ということがよくあります。私は皆さんに私がどこまで出来るのかを知ってもらいたい、そして私ももっと皆さんのことを知っていきたいと思っています。これからM地区の皆さんともっと「あたりまえの関係」を築いていけたらと思います。」

(Gさん 59歳)

### (4) 地域の将来展望

集落人口が徐々に減少するなか、地域の高齢者による若い人に対する定住への期待がある一方で、職場の確保が困難である等の問題が多く、集落の将来への不安感を感じている住民は多い。

「特に若い人が増えることが地域の活性化やこれから先のM地区を担っていくことにつながります。そのためには、地域の若い人が結婚して家庭を持ちこの地に定住してくれることや、その若い人たちが働く場所が必要になってきます。」(Aさん 71歳)

「若い人に地元に残ってほしいと思います。でも、地域での生活も難しいし、やっぱり出て行ってしまふんだらうなあと思っています。」(Iさん 74歳)

「M地区については、高齢社会になっているので、今後若い人達が少なくなるので将来が不安です。また、戸数が少なくなり、寂しくなるので地域の活性化に取り組む必要があると思います。」

(Fさん 61歳)

平成19年度で小学校が閉校になり地域の教育機能が低下する中で、ますます若い人の定住が困難になっていく。このような状況を解決するためには、集落内でさらに連帯を強めて助け合うこ

とが必要であると感じている人が多い。特に限界集落であるM集落では、元気な高齢者が生活に不自由している高齢者の面倒を看るという状況があり、このことによって、よりいっそうの相互扶助が望まれている。

「今年でこの地区の小学校は閉校になり、来年からは子ども達はスクールバスで学校まで通わなくてはなりません。また、最近では過疎化が進み、お年寄りの一人暮らしも増えてきました。子どもがいる家は私の家を含め、三軒しかありません。正直、五年先も見えない状況ですが、悲観的に考えてはいません。ここは自然がたくさん残っており、都会と違ってのんびりとしています。また、この田舎の地域性はとても魅力的だと思います。大変な状況ではありますが、皆で頑張っていきたいです。」(Qさん 42歳)

「M地区は三年に一軒くらいのペースで住民が減少していくので、十年後は一体どうになってしまうのか心配です。こんな時だからこそ、地域の住民同士の助け合いが必要なのではないでしょうか。」(Hさん 67歳)

「地域に愛着があっても様々な理由によって出ざるを得ないこともあります。私も介護施設に泊まってお手伝いをさせていただいていますが、このM地区では元気な高齢者が高齢者を看るという状況にあります。地域を守っていくためには、地域の人達が連帯して何とかしなければならないと考えています。」(Eさん 66歳)

#### 4.1.3 地域的問題

「地域への思い」を聞く過程で、地域的問題について住民から語られることが多かった。

##### (1) 地域内諸施設の消滅

以前は地域の中心であったM集落も、人口減少に伴い商店数などが減少した。最近では市町村合併の影響で、まず集落から農協がなくなり、その後、調査年度(平成19年度)の時点で小学校も閉校となることが決定していた。小学校は単に教育機能を持つだけでなく子どもを中心とした行事の場でもあるが、小学校の閉校はそこでの行事を介して維持されてきた地域住民の連帯機能の弱体化も意味する。

「雲南市に合併されてから、農協がなくなってしまい、さらに来年には小学校が統合されます。でも郵便局は残るので、これは守っていききたいと思います。この集落も、昔は三十戸ありましたが年々減っています。昨年も二軒出て行きました。」(Kさん 73歳)

「小学校が統合されて、子供たちは来年からスクールバスでの通学になります。現在ではI小学校には十五人ほどの生徒がいて運動会なども皆でやっていますが、統合後はこうした行事もできなくなるかと思うと寂しく思います。合併は中央ばかりが得をして、末端には何もないものだと思います。」(Jさん 74歳)

##### (2) 集落行事の維持

集落での行事は、行事を楽しむと同時に地域の人々が集い連帯意識を再確認する意味も持って

いる。しかし集落が高齢化し行事運営の負担が大きくなると、担い手不足が地域内で問題化してくる。行事が失われれば、人々が集う場がなくなり、集落の結びつきが弱くなることが予測される。

「かつてはM地区がI地区の中心でお店もたくさんあって栄えていましたが、人が少なくなり、行事なども年々寂しくなっています。」(Cさん 77歳)

「集落では運動会だけでなくいろいろな行事があります。八月の十四日には夏祭りがあり、お宮さんや神楽、安来節などが披露されます。芸人さんがこられて、踊ったり三味線を弾いたりして大変にぎやかなものです。他にも十月の第四土曜日にも祭りがあつたりします。でも、こうした行事も若い人が少なくなってだんだんとやりづらくなってきていると思います。」(Jさん 74歳)

### (3) 移動の大変さ

中山間地域にあるM集落は、日常の暮らしに欠かせない施設がかなり限られている。そのため、食材等の必需品や医療等の必需サービスを求めるために移動手段が必要である。この集落における移動手段は自家用車が中心であるが、それを持たない場合には、停留所が遠く本数も少ないバスやだんだんタクシー<sup>6)</sup>に頼るしかなく、特に移動手段を持たず身体能力が低下した後期高齢者は不便な生活を強いられている。

「そんな大好きなM地区ですが、暮らしの中で困ることも当然出てきます。今気になっているのは、病院と買い物です。町の診療所では入院ができず、入院するためには三刀屋や大東にまで出なければなりません。また買い物も遠くまで出かけなければならず、交通の便が良いとは言えないこの地域では難しい問題ではないでしょうか。私の家は自家用車で出かけていますが、他に交通手段がだんだんタクシーしかなく、運転できる人がいない家では大変だと思います。」

(Aさん 71歳)

「この地区は買い物が不便です。バスは停留所まで遠く、夫が出雲の病院に通っているときは通院のついでに出雲で買い物をしていました。しかし今では、わざわざ出雲まで出るのも億劫なので、めったに出雲までは行きません。」(Bさん 82歳)

### (4) 雪かき

積雪地域に共通する作業として冬季の雪かきあげられる。特に一人暮らしの高齢者には屋根の雪かきは重労働であり、周囲の援助によって何とか処理している状態である。また、車道上の雪は除雪車によって処理されるが、処理された雪は歩道に積まれる。歩道の雪の処理は住民自身が行うほかなく、高齢になるほど負担になっている。路上の雪掘りの作業中に腰を痛め、日常生活に支障が生じている例も見られた。

「冬になると雪かきが大変です。主人がいる頃は二人でやっていましたが、主人が亡くなってからは一人でしなくてははいけません。そのため大雪の日は、半日がかりで雪かきをします。それでも屋根の上の雪は自分で落とすことができないので、個人的に知り合いの方をお願いして落とし

てもらいます。落とした雪は、自分で処理しなければいけません。・・・。」(Bさん 82歳)  
「あと、雪がたくさん降ったときは、除雪車が来て車道を除雪してくれます。でも歩道は除雪してくれません。これはすごく不満です。結局、車道を歩くことになりますから。子どもには特に危ないです。それにうちの家には誘雪溝がないため雪がたまっています。」(Kさん 73歳)  
「大雪となった平成十八年に雪掘りをしていて腰を痛めてしまい、それ以降思うように体が動かさなくなってしまいました。二か月間ギブスをしてお風呂も止められてとても悲しい気持ちになりました。コルセットに変わってからはお蔭様でかなり楽になりましたが、足腰に力が入らずまだなかなか遠くへ行くことができません。」(Cさん 77歳)

#### 4.2 第2次聞き取り調査の結果

M集落の住民の方に「文集」を配布して約3週間後、文集による家庭内・地域内での心理的影響を測定するため、文集に参加した集落内の対象者に聞き取り調査を行った。事前に調査内容の説明と調査期間について連絡をしておいたが、家庭内の事情等で時間がとれないお宅も多く、結果として、読んでいないと回答した1戸1名以外の9戸10名の対象者から文集に関して話を聞くことができた。

##### 4.2.1 文集に対する認知と評価

配布した文集について、読んだかどうか質問したところ1人を除いた残り10名の調査対象者が全て読んだと答えた。自分たちの住む地域の人々について、ほとんどの人が関心を持っている。また、文集に参加した人に対し、「語りたいたことがだいた書けていたか」という設問をしたところ、6人が「そう思う」と答えた。「あまりそう思わない」という人が2人、残りが無回答であった。

「普段は集落の人たちと、いろいろな話しをよくしますか」と聞いたところ、日常生活では近所何件かの仲の良い人や地域の役職で関係のある人とよく話すことがわかった。日常での人間関係の範囲は空間的・社会的にあまり広がらないことがうかがえる。その上で、「集落の他の人たちと、文集について何か話をしましたか」という質問をしたところ、「何人かとお話をしたけど、みんな喜んでいた」(Fさん)ようである。文集には文章だけでなく地域の風景写真を掲載していたが、それが地域内の意外な側面を発見することにつながり、話をするきっかけになったようである。

文集作成は地区にとって良かったかという質問には、ほとんどの人(8人)が肯定的であった。

##### 4.2.2 文集による自己確認

「9月にお伺いしたときに話をして貰ったり、また文集となって自分の話をまた読んだりしたことは、自分の生き方をあらためて考えるきっかけになりましたか」という問いに対し、4人が「そう思う」「ややそう思う」という肯定的意見であり、2人が「あまりそう思わない」「そう思わない」という意見であった。残りは「どちらでもない」および無回答であった。

肯定的意見の中で、「今まで何が自分の生き甲斐だったんだろうかなあと考えました」という回答があった。男手一つで子育てをし、子育ての後すぐに両親の介護をすることになった人である(Hさん 67歳)。これまで忙しくいろいろ考える時間もなくて働いていたが、文集を書くというこ



とが自らを省みる機会になっている。Hさんは、「聞き書き文集」の中で、自分の2人の子どもが問題なく育ったことへの安堵感、孫の顔を見るのがとても幸せであること、福祉施設での夜間警備などで責任のある仕事を任されていることなどに喜びを感じていると述べる一方で、最後に「これから生き甲斐を見つけていきたい」と語っている。

#### 4.2.3 家族間の知識・思いの共有

「家族の人たちは、文集をお読みになっていましたか」という問いに対し、7人が全部あるいは一部を「読んだ」と回答し、それ以外の3人が「読んでいない」および「無回答」であった。

「家族の間で互いに考えなどを知りあう機会となりましたか」という質問に対して、肯定的意見は4人であり、否定的意見は1人であった（その他は同居家族がいない）。子どもなどの別居家族とは話をしていない人がほとんどであった。ただし、「自分らの書いたところでは発見はなかった。普段から毎日よく話をしているので」などの意見に見られるように、同居している夫婦間では特に新たな発見はなかったようである。話した内容は、「皆誰もが同じ気持ちなんだな、不安を抱えているんだな」など地域の将来に対する不安が多かったが、一方で「みんな田舎におりながら田舎を見捨ててないな、と思った」（Fさん）など、集落住民の多くが集落を良くする思いを持っていることについて夫婦で話した人もいた。

#### 4.2.4 地域住民間の知識・思いの共有

「文集に、M地区の他の人たちのことについて、知らないことなどが書いてあったか」という問いに対し、ある程度のことはわかっていたという意見が多かったが、他の人の過去のことや、「障害者の方のところを読んでもっとわかってあげられたらよかったと思った」（Eさん）など障害を持つ人の日ごろの思いについては初めて知ったという人が多かった。

「文集を読んで、地区の他の人たちの考え方や気持ちがよく理解できたと思いますか」という問いに対し、すべての人が肯定的意見であった（「そう思う」7人、「ややそう思う」3人）。「人の思いというのは見栄を張って出さないものだけど、それが文集ではスラリと出ていた」（Fさん）という意見からもわかるように、日常の会話では自分の気持ちを出さない（出せない）が、モノローグとして「語った」内容が文集中に自分の正直な思いとして表現され、それが他の読み手に伝わっているようである（「雪かきの大変さ」「地域の将来に対する不安」など）。

以上から、他の地域住民に関する情報はある程度認識しているが、その人たちが日頃持っている「思い」についてはあまり共有されていないことがわかった。

## 5. 聞き書き文集プロジェクトのまとめ—考察と効果

### 5.1 第1次聞き取り調査の考察

#### 5.1.1 生き甲斐について

M集落に住む人々の生き甲斐は多様である。まず趣味では、音楽、詩吟、盆栽、絵手紙などがあげられる。個人で楽しむことが第一目的の人もいるが、地域内外の人とのかかわりを重視する人がかなり多い。その場合、趣味はそれ自体が目的であると同時に、集落住民を中心とした他者

との交流の手段でもある。また、郷土史の編集という生涯学習活動に没頭する人もいた。この人は、自分が楽しむだけでなく配偶者をも巻き込むことで、夫婦一緒になって様々なことを調べまわっている。生涯学習が、夫婦という家族内のつながりを強化した例である。趣味・生涯教育は、自分が楽しむだけでなく、他の地域住民との関係を生み出したり、夫婦のつながりを強めたりする機能を持っている。

文集の中で、「あらためて生き甲斐と言えるものはない」という表現がところどころで見られた。しかし、趣味・生涯学習のように、自他ともに個人の楽しみとして明確に意識できるものだけが生き甲斐とは限らない。

まず、「子どもの成長が生き甲斐だ」という人が多く見られる。これは、自分の人生を振り返ったとき、自分(あるいは夫婦)が育てた子どもが立派に成長したことが、自分が生きてきた証となって再確認されている。「孫の顔を見るのも楽しい」というのは、理屈なしにかわいい部分に加えて、自分が一所懸命生きてきた過程で家族が拡大し、その象徴的な結果が世代を引き継ぐ孫の存在であるという思いがあると思われる。

次に、ボランティア活動が生き甲斐という人もいる。若い世代のQさん、美化活動のボランティアを行っているDさんである。Dさんは「今はM地区に数ヶ所ある花壇を作ったりしています。自分が植えた花を他の人に見てもらふことも、見てもらって「綺麗ですね」という言葉をかけてもらうのもうれしいです。(Dさん 65歳)」と述べているが、ボランティア活動によって、地域貢献を通して自分の存在を確認するだけでなく、自分が丹精こめて育てた花をほめられることが嬉しいという「他者から認められたい」という欲求、すなわち承認欲求を満たしていることが読み取れる。

Iさんは、小商店を経営し続けることで地域の人から「信頼され必要とされるのが嬉しい」と感じており、経済的利益を得ること以上に、集落内に必要な購買機能を維持し、交流の場を作ることを生き甲斐としているようである。Iさんの意識には、個人としての欲求よりも集落内の他者への貢献意識の方が強く感じられる。またその貢献意識は、「～すべき」という義務感からではなく、他者のために行っている自分の行為が人に喜ばれることから生じる充実感から生じており、それが日常生活への意欲につながっている。

Nさんは、親の代から続けている毎日の新聞配達が生き甲斐の一つとなっている。配達を休めないため旅行等の趣味も犠牲にせざるを得ないが、地域の人々に貢献するという意識がNさんの生き甲斐の一つとなり、その行動を支えている。

このように、ボランティア活動、商店の経営、新聞配達など行動形態は異なるが、これらに共通する動機は地域への貢献意識であり、地域に住む人々のために尽くすという行為が生き甲斐となっている。

以上のことから、過疎地の集落住民にとって、個人単独で楽しむ趣味よりも、人間関係を形成し交流すること、子どもや孫などの家族の存在、他者から認められたいという承認欲求、地域住民への貢献など、他者との社会的関係の強さが前提となる生き甲斐が非常に大きな意味を持つことがわかる。

### 5.1.2 地域への思い

M集落が生まれ育った場所である住民は多く、そのことは集落への愛着へとつながっている。また、山や川があることに対する評価、すなわち自然環境に対する評価が高い。このことが地域への愛着につながっている<sup>7)</sup>。

地域的愛着は、地域や隣人への貢献意欲をはぐくむ。貢献意欲の形成過程には2つのパターンがある。一つは、生まれ育った住民は故郷である地域に対して運命共同体的意識を持っており、同じ地域に住む他の住民に対して、できることを行うのが当然であるという意識を持つ場合である。集落に住む高齢者に多い。もう一つは、一定期間当該地域に住むことで地域的愛着が形成され、その結果その地域に貢献したいという意識が形成される場合である。仕事の関係で集落に居住しているQさんの場合がこれに該当する。このような集落で貢献意欲を持っている人は、その多くが他の住民への生活援助やボランティアなどで、実際に貢献活動を行っている。

集落では住民構成の変動が少なく、居住年数が長い人の間では、他の住民の家族状況、職業など様々な情報をお互いに共有している。ただし、居住年数が比較的短い人や特別の理由で他の住民との接触が少ない人との間では、相互理解が弱い傾向が見られる。例えば、健常者と障害がある人の日常での生活意識の差は大きい。障害があるがゆえに移動の時間がかかるといった具体的な生活状況は、健常者による外からの目には見えず、理解しにくいからである。長期間同じ地域に居住していても、住民の詳しい生活状況やそこから生じる「思い」については共有できない場合がある。ここから、空間的な距離は近くても、住民による相互理解が弱ければ、社会的距離は遠いことが理解できる。

M集落の地域住民の多くは、集落の先行きについて不安を持っている人が多い。個々人一人一人が独自に不安を抱えていて、他者と共有できない場合、精神的な負担が大きい。単に自分を守ることに意識が集まり、不安が増大するだけである。同じ不安を持っていても、その意識が他者や地域内で共有できていれば、個々人の不安の意識が集落共通の危機意識となり、そのことが住民による共同行動のきっかけとなりうる。

### 5.1.3 地域的問題

M集落において、市町村合併の影響による集落内の農協代理所の閉鎖や小学校の閉校など、地域における経済的・教育的な生活機能の縮減が進行している。集落住民には、これまで以上に住民生活が不便になるだけでなく、次世代を育成する小学校という教育機関がなくなることへの不安が生じる。さらに、現在の日常生活の不便さや不安が増すだけでなく、次は郵便局がなくなるともかもしれないなど、地域内施設が減少していくことに対する将来的不安も生み出す。これらのことが、より住民の心理的圧迫を強くしている。またM集落は地域内行事が多いが、住民が不安に感じているように、若年層の減少や高齢化の進行によって、今後その維持が困難になっていくことが予想される。現状の行事を維持できず縮小・消失したりすると、地域内の人々の接触や協働の場を失うことになり、住民間を結びつける連帯機能の低下につながる。

徒歩で移動できる生活圏内に生活機能が不足する場合、移動の手段が必要となる。自家用車がない場合、公共交通機関に頼るしかない。雲南市掛合町では旧町の頃から全国に先駆けて「だん

だんタクシー」という地域交通システムを運行しているが、それでも移動に負担を感じている住民（特に自動車の運転ができない高齢女性）が存在する。これらの住民にとって、日常的な食材購入の不便さは恒常的に生じているし、特に問題なのは突然の疾病などが生じたときであり、医療上の不安は非常に大きいと思われる。

雪かきは、積雪量の多い地域の生活維持のためには不可欠な作業であるが、高齢化により不可能になりつつある。「隣のお婆さんも2年前の大雪の大変さのことがあって千葉に移っていらっしやった」（Jさん 第2次聞き取り調査から）ように、高齢になって雪かきが不可能になり、自分の子どものいる千葉へ移転した例もあった。雪かきへの負担は、集落からの転出の大きな原因になっている。

## 5.2 第2次聞き取り調査の考察—文集プロジェクトの効果

### 5.2.1 自己確認の効果

学生の聞き取りに対する「語り」という行為や、その結果を基に作成された文集を読み返す過程で、回答者の4人が自分の人生を振り返ったことに対して肯定的であり、2人が否定的であった。この結果から、文集作成の過程での「語り」や文集の「読み返し」は自分の人生を振り返ることにある程度の効果があると言える。

肯定的立場の一人であるHさん（67歳）は、自分の「語り」を通して、自分の今後の生き甲斐について再確認している。Hさんは、2人の妻と離別後2人の娘を男手一つで育て、子どもが独立してからは両親の介護で非常に忙しい人生を経験してきた人である（調査時点でも88歳の母親を介護中であった）。Hさんは、第2次調査で「今まで何が自分の生き甲斐だったんだろうかなあと考えました」と回答しているが、文集では「これから生き甲斐を見つけていきたい」と語っており、人生への後悔は感じられず、むしろ今後の生き甲斐を見つけることに積極的である。この事例から次のことが考えられる。

Hさんは、今まで子どもの育児や両親の介護に対して、自分の置かれた状況を受け入れ、家族のために精一杯尽くしてきた。その人生の過程において「家族を守る」ために全力で生きてきたことが充実感をもたらし、それが無意識的な生き甲斐になっていた。他方、集落外部からの聞き取り調査によって自分のことを「語る」ことは、「自分のため」の生き甲斐を見つける機会になったのである。この事例から、「語り」には、自己を確認する効果が一定程度見られると指摘できる。

### 5.2.2 家族における「語り」の共有化効果

文集は家族内で読まれているものの、夫婦間以外ではあまり考えなどを共有する機会にはならなかったようである。また夫婦間でも「自分らの書いたところでは発見はなかった。普段から毎日よく話をしているので」などの意見からわかるように、お互いに関する事実や考えなどについて文集から新たな発見は見られない。

ただし、夫婦間において文集に記載された地域の人々の思いについて話し合う機会はあったようである。例えば、「皆誰もが同じ気持ちなんだな、不安を抱えているんだな」、「みんな田舎におりながら田舎を見捨ててないな、と思った」など、地域の人々が持っている思いを夫婦間で共

有する効果が見られた。

### 5.2.3 地域住民間における「語り」の共有化効果

第2次調査の分析から、比較的居住年数の短い人は、他の人の過去について初めて知ることが少なくないようだが、居住年数が長い人々の間では、他の住民の情報についてある程度把握していることがわかる。移動量が少ない住民が多い集落では、他の住民の家族構成、仕事内容、健康状況など、認識しやすい外面的な情報はかなり共有されている。

それに対し、住民間でそれぞれの「思い」を共有することは困難である。日常生活においては「人の思いというのは見栄を張って出さないもの」(Fさん)だからである。「それが文集ではスラリと出ていた」(Fさん)という意見にもあるように、文集作成過程における「語り」によって、自分の「思い」を表現することが可能となっている。

例えば、身体に障害があるGさんは、他の住民に「気を遣ってもらっているために、距離感を感じている」が、このことを日常生活では他の住民に伝達しにくい。Gさんに「気を遣う」他の住民のやさしさが、他の住民とは別の存在として特別扱いされるというGさんの意識を生み、そこに距離感を感じるからである。このような「思い」を日常会話の中で伝達することは、相手に理解されるかどうか不確実であるため、非常に困難である。しかし、第2次調査において、文集を読んだ他の地域住民が「障害者の方のところを読んでもっとわかってあげられたらよかったと思った」と語るように、「私は皆さんに私がどこまで出来るのかを知ってもらいたい、そして私ももっと皆さんのことを知っていきたいと思っています。これからM地区の皆さんももっと「あたりまえの関係」を築いていけたらと思います。」というGさんの切実な「思い」は、今回の文集作成を通して他の住民に伝わっている。

このように、集落構成員以外の外部からの介入により作成された文集には、地域住民間の対面的コミュニケーションでは困難な「思い」の伝達、そしてその「思い」の共有化を可能にする効果があると指摘できる。

### 5.3 地域社会における文集作成の意味

以上、第1次および第2次聞き取り調査の分析と考察を行ってきたが、それらを整理すると以下ようになる。

まず、第1次調査によって作成された文集での住民の「語り」から以下のことがわかった。

- (1) 中山間地域に住む人々の生き甲斐は、個人的志向のものよりも、むしろ他者との関係性を志向するものが多い
- (2) 地域への思いも強く、地域的愛着も強い。また貢献意欲も強い。
- (3) 地域における高齢化の進行に伴い地域が抱える諸問題が増加している。具体的には、地域内諸施設の消滅、集落行事の維持の問題、移動の大変さ、雪かき、などが見られた。

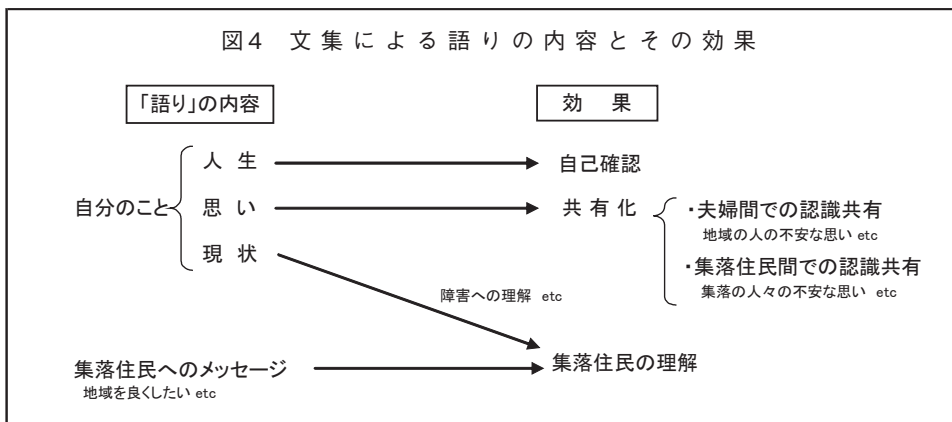
今後、現在の高齢者がより高齢化していくため、多く抱えている地域的問題を集落住民個人で処理していくことはますます困難になることが予想される。地域の多くの個人が抱える諸問題を

解決するための援助として、自分自身で解決する「自助」、近隣住民で支えあう「互助」、自治体など公的機関が支援する「公助」が考えられるが、3つの援助の中では、高齢化の進行により特に高齢者の「自助」の部分が困難になっている。ただし、集落には、生き甲斐において他者との関係性は非常に大きな意味を持ち、他者とのかかわりが強く地域への貢献意欲も高い住民が多い。これらのことから、集落内での住民間援助、すなわち「互助」がある程度期待できる状況であると言える。

次に、第2次調査の結果は以下のように整理できる。

- (1) 文集作成の過程における「語り」によって、「自己確認」の効果がある程度見られた。
- (2) 「家族」においては、夫婦間で地域の人々の思いを共有する効果が見られた。
- (3) 「地域社会」における「文集」作成は、日常生活では可視化しにくい地域住民一人一人の「思い」を表面化させ、それを地域の他の人々と「共有化」する可能性をもたらし効果が見られた。

第1次および第2次聞き取り調査の結果を簡単に整理したものが以下の図である（図4）。



以上のように、外部から介入して作成する「文集」は、自分を振り返る自己確認や家族・地域における思いの共有化などの効果がある程度期待できることがわかったが、それは地域社会においてどのような実践的意味を持つのだろうか。

限界集落の地域的問題に対応するためには、住民間の相互扶助である「互助」が必要不可欠である。しかし「互助」は、すべての住民に地域的問題が集落全体で危機的状況にあると認識されなければ、一部の住民間でしか行われまいであろう。「互助」を集落全体で有効に機能させるためには、集落全体における危機的状況の認識の共有が必要である。そのためには、住民すべてが自分の心の中の不安を率直に語ったり、援助される側が日常的に感じている自分の内なる「思い」をさらけ出したりする場が必要である。住民が自分の「思い」を表現し、それを「共有」することが、集落全体での住民間の相互扶助を生み出す土台となるのである。「文集」作成は、集落住民の「思い」の共有化をもたらし、集落住民間の連帯を強め、「互助」を活性化させるという形で機能す

ると考えられる。

しかし、高齢化が進む限界集落での住民間の「互助」にはどうしても限界がある。援助する側の住民も高齢化し、援助する能力が低下していくからである。そのため、自治体等による「公助」は限界集落において不可欠であるが、財政等の問題もあり「公助」の量に限りがある。量的に制約のある公的援助を有効に活用するためには、「住民が生活する上で本当に何を求めているのか」について知り、最も求められているものに優先順位をつけて対応していかざるを得ない。住民の生の声を聞くために「公助」として「文集」作成を推進し、記述された「語り」の内容を支援策の策定の参考にすることも一つの有効な手段であろう。

#### [付記]

本調査は、島根大学プロジェクト研究推進機構「重点研究部門」の助成を受けて、「中山間地域における住民福祉の向上のための地域マネジメントシステムの構築—「健康」と「生き甲斐」の学際的分析を通じたアプローチ」（代表：伊藤勝久生物資源科学部教授）の調査研究の一環として2007年度に実施されたものである。

この調査では、M集落の住民の方々に多くのご協力いただきました。またM集落自治会長のT氏には、第1次・第2次調査の準備段階、実査段階、追跡調査など何度もご協力いただきました。M集落の住民の方々には、この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

#### [注]

- 1) 小田切は、「あきらめの意識」の拡がりを阻止し除去するためには、行政、NPO、ボランティアなどによる「目配り」の力が重要であると指摘している（小田切2008）。
- 2) M集落の歴史は、M集落自治会長のT氏への聞き取りの結果をまとめたものである。T氏は郷土史の作成のため、I地区やM集落の歴史について調査している。
- 3) 「雲南市立I小学校閉校記念誌 I」（2008年発刊）より。I小学校は明治7年に開校した歴史ある小学校であるが、過疎化による児童減により、平成19年度に他校に統合され閉校した。「記念誌」はその歴史をつづるために作成されたものである。
- 4) 図2は、雲南市掛合総合センター提供のデータを使用して作成した。なお、1987年および2000年のデータが欠損していたため、その2時点のデータは推定値として前後の年の平均値をとっている。
- 5) 図のデータは2007年に実施した第2次聞き取り調査および2008年実施の追跡聞き取り調査により収集。なお合計数は39名であり、市から提供された数値とは異なるが、市のデータは一時的に施設に入所している高齢者などを含んでいると推測される。
- 6) だんだんタクシーとは、旧掛合町（現在では雲南市掛合町）内で運行されている乗り合い型のタクシーのことである。行政がタクシー会社に運行を委託している。料金は一律300円であり、30分前までに予約を入れると自宅まで迎えに乗客を迎えに行き、用事を済ました後再度予約すると自宅まで送ってくれる地域交通システムである。夏季5～6便、冬季4便運行する（『月刊 地域づくり』平成17年6月号 特集 地域交通システム）。予約をすれば自宅の玄関先までタクシーで送迎してくれる、全国的にも先駆的なシステムである。
- 7) 島根県の高校生を対象にした意識調査（2001年実施）において、充足的生活環境評価（「自然環境」の良さ、「文化に触れる機会」の多さ、「子どもを育てる環境」の良さ）が高いほど、地域的愛着を強めるという結果が見られた（江口2002）。データにおける年齢層の相違はあるものの、高齢層においても、居住地域の自然環境が良いという評価は当該地域への愛着を強める大きな要因になっていると言える。

[文献]

江口貴康2002「地方高校生の地域愛着意識とUターン —島根県の高校生調査から—」『社会システム論集』7号, pp.55-70

大野晃2005『山村環境社会学序説』農文協

小田切徳美2008「「限界集落」の実態と政策課題」,『地域政策—三重から』春季号 No.27, 公人の友社

笠松浩樹2005「中山間地域における限界集落の実態」,『季刊中国総研』第32号, pp.21-26

作野広和2006「中山間地域における地域問題と集落の対応」,『経済地理学年報』第52巻, pp.264-282

吹野卓・片岡佳美2006「語られた「生き甲斐」の構造—中山間地域調査における自由回答の数量的分析—」,『社会文化論集』第3号, pp.15-27



# An experimental study for sharing "the stories" among the people in a marginal village :

A case study in the community of Kakeya-cho, Unnan-shi, Shimane

EGUCHI Takayasu, KATAOKA Yoshimi and FUKINO Takashi

(Faculty of Law and Literature, Shimane University)

Keywords : marginal village, the stories, real feeling, anthology, joy in life

## { Abstract }

Rural communities have played various roles that go beyond agricultural production. Recently, because of the rising age of the rural population, in addition to conventional roles (e.g., funeral rites and traditional events), the community is expected to play the roles that families have traditionally played (e.g., caring for elderly and doing household chores). As a result many rural communities in the hilly and mountainous areas are in a state of crisis because the number of people and households continues to decrease.

Those communities in which the people can no longer play many of their roles are referred to as "marginal villages" and seen as a serious problem for the residents' well-being. Especially, keeping residents from losing their purpose in life may become a matter of vital importance in such marginal villages.

Although everyone has his/her own meaning or joy in life, our previous study suggests that people in marginal villages tend to want to get a feeling of really living through experiences that demonstrate that the significance of their existence is accepted and understood by other people. This tendency may be related to the fact that residents of marginal villages are at a disadvantage in terms of doing activities and work.

Based on this idea, we developed an anthological study that records what the researchers heard. This project aimed to collect the live voices of the people in a marginal village and then give them those voices in the anthological form. It was an experiment to give the people the opportunity to rediscover their neighborhood.

This study was carried out in a marginal village in Kakeya-cho, Unnan-shi, Shimane prefecture. In 2007, we conducted interviews with 17 residents (total population 39), organized the stories they told the researchers, and published them in an anthology. After publication, we interviewed the same people again in order to assess the influence of the anthology.

As a result, we found the following:1) the anthology might cause mutual understanding among the people; 2) telling their own things to other people to make the anthology might bring them the real feeling of their own lives. From these findings, we suggest that the anthology project as an approach from outside could contribute to the well-being of the residents in marginal villages.

It is certain that such an approach is nothing but a first step. Verifying whether the mutual understanding brought about through the anthology causes the revitalization of the community should be investigated further in the future.

